

2022年度
入学試験問題

国語

2月11日

受験番号	氏名

中村高等学校

問題は次のページからです。

一 次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書きな

さい。

- (1) 寺の境内で遊ぶ。
- (2) 唐の時代の官吏。
- (3) 蹴球とはサッカーのことだ。
- (4) 岬にある灯台を見に行く。
- (5) 卒業式の厳かな雰囲気。

二 次の各文の——を付けたカタカナの部分に当たる

漢字を楷書で書きなさい。

- (1) ハッコウ食品を食べる。
- (2) 大学でリョウウ生活を送る。
- (3) 伯父はラクノウをしている。
- (4) マドワクから身を乗り出す。
- (5) 心配でマユをひそめる。

三 次の1～3の和歌には、下に記した()の中の数だ

け歴史的仮名遣いで書かれた語がある。それを探し、
現代仮名遣いに直して平仮名で書きなさい。

1. あをによし ならのみやこは さくはなの
にほふがごとく いまさかりなり(2)
2. かすがのは けふはなやきそ わかくさの
つまもこもれり われもこもれり(1)
3. ゆふされば かどたのいなば おとづれて
あしのまろやに あきかぜぞふく(2)

四 次の二つの文章を読み、後の問いに答えなさい。

(設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。)

* 字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

文章I

カテゴリーをあてはめて、他者を了解するという営みは、すでに述べているように、私たちの日常生活にとつて、基本であり、誰もが回避し得ない重要なものなのです。そして、その営みを手がかりとして差別を考えようとするとき、どのような問いを準拠とすればいいのでしょうか。

人々の社会的営みそれ自体を根底から読み解こうとした二〇世紀アメリカの優れた社会学者にハーヴェイ・サックスという人がいました。惜しいことに自動車事故で若いうちに亡くなってしまったのですが、サックスは社会的なものと考え方を豊かにする多くのヒントを残してくれています。

カテゴリー化という問題を考えるうえで重要な点。一つは、ある人々や集団を示すカテゴリーを誰が所有しているのかという点です。さらに言えば、ある人々や集団を示すカテゴリーは当該の人々や集団が所有しているのではなく、支配的な社会や文化が所有し、そこに込められる

意味を決め、当該の人々や集団にあてはめようとする点です。

もう一点。それは自らを名指すカテゴリーを支配的な社会や文化から取り返し、そこに自らにとって適切な意味を新たにこめていく可能性を考えることです。また新たに自らを名指すカテゴリーを創造し、実際にそのカテゴリーを自らにあてはめ、新たな意味に満ちた存在として主張することを通して、旧来の社会や文化に対抗していく革新的な営みを考えることです。

サックスが示してくれたヒントは、私たちがかつての世の中、そして今の世の中に「あたりまえ」として息づいている差別的見方を批判的に捉え返すうえで、大切なものなのです。

1 一つの例を考えてみましょう。いま、クールジヤパンとして日本のアニメやコミックが優れた文化であり芸術だとして全世界に知られています。その草分け的な存在として手塚治虫という漫画家がありました。彼は、日本の漫画家にとってカリスマ的な存在であり、「鉄腕アトム」「リボンの騎士」「ブラック・ジャック」など数々の名作、傑作を生みだしてきました。

2 私にとって手塚治虫は、身近な存在でした。

3 彼は私の出身高校の遠い先輩であり、手塚が高校生時代に図書室に残した落書きは、貴重な記念としてそのまま保存されていました。「ああ、こんなところに落書きしていたのだな」と、私も含め多くの高校生は驚きとともになにか誇らしげに見ていました。

さて、手元にある手塚の作品集には、出版社が書いた興味深い「あとがき」があります。すべて引用することはしませんが、概要はこうです。手塚治虫の作品の中には、その一部に人種差別や偏見につながる表現があると指摘されている。これらの作品が発表された当時、作者にはもちろん読者にも差別意識はなかったのだが、こうした描写を差別や偏見だと感じる人がいる以上、その声に真剣に耳を傾けるべきだ。著者の原作を尊重し、作品の底に流れるヒューマニズムを正しく伝えるべく、当時のままで作品を提示するが、読者は見落としがちな人種差別や偏見について、いつそうご理解を深めていただきたいと。

人種差別や偏見につながる表現とはどのようなものでしょうか。たとえば黒人であれば、分厚い唇がことさら強調され描かれていたのです。これは漫画などでよく使われているデフォルメとも言えるのですが、確かに黒人とはこんな存在だと決めつける表現であることも確かでしょう。

ただ私はあとがきにあるように当時著者や読者に差別意識があつたか否かという人々の意識の次元だけで了解することには同意できません。

なぜ手塚はそうした表現を採用したのでしょうか。漫画はたとえ扱うのが難解なテーマであっても、誰にでも楽しめるものではないでしょうか。とすれば漫画には、誰がみてもすぐわかるような表現が必要となるでしょう。65

「みてわかる」とは、まさにサクスの言う支配的社會や文化が所有しているカテゴリーを用いることで円滑に達成できるのです。つまり手塚は、創意工夫で独自の表現を創造したことは確かですが、同時に当時支配的であつた人種や民族の了解の仕方をそのまま踏襲していたと私は考えます。70

たとえば当時「ダッコちゃん」という、まさに黒人の女の子をデフォルメしまくつたようなビニール人形が大ヒットしたことがあります。若い女性はそれを腕につけて街を歩いていました。また私が大好きだった怪獣映画にはよく南洋の島やそこで暮らす人々が登場しましたが、彼らの姿や演技は今から見れば、差別的だと批判する以前に、滑稽だとしか言いようがないものでした。日本人俳優が体を褐色に塗り、腰みのをつけ、槍や盾をもち、主人公の日本人

が島にやってくれば、「むかし、日本人、いた」と片言の 80
日本語をしゃべっていたのです。なんとお粗末な南洋のイ
メージでしょうか。「南洋」は未開という粗雑な発想が怪
獣映画という娯楽作品にもしつかりと息づいていました。

ある人々や集団、地域や状況を「きめつける」さまざま
なカテゴリー化が「あたりまえ」のこととして、その時々 85
の A に息づいているのです。

何が差別なのかは、時代状況、被差別当事者の異議申し
立てや解放運動などの影響でどんどん変化しています。ま
た今の世の中においても「決めつける」カテゴリー化は、
さまざまに生きているでしょう。だからこそ、誰が差別的 90
かという差別者探しをするのではなく、どういった状況や
営みのなかで差別的なるものが生じるのかを考えるべきな
のです。

カテゴリー化を手がかりとして、日常に生起するこうし
た多様な営みをじっくりと読み解いていく作業こそ、「他 95
者を感じ、差別を考える」社会学の核心なのです。

（好井裕明『他者を感じる社会学 差別から考える』

筑摩書房）

文章II

今回、コロナ対策でもっとも成功した一例とされている
のが台湾です。感染封じ込めと経済刺激策によって、20
20年の経済成長率もプラス成長を見込むという優秀さで
す。

台湾には自らの歴史をうまく生かし、エネルギーに 5
独自性を培っている印象を覚えます。その台湾のコロナ対
策のなかで存在感を発揮していたのが、IT担当大臣の才
ードリー・タン（唐鳳）さんです。14歳で学校に馴染めず中
退し、その後はシリコンバレーで起業するなどして、35歳
で台湾史上最年少の閣僚になったという経歴の実力派。ト 10
ランスジェンダーであることも公表しています。

実力者が抜擢ばってきされるには、その内部に実力のある人がい
なければ無理です。ですからタンさんのような存在自体が、
台湾がいかに実力主義であるかを物語っているわけです。

日本の場合、実力よりもその人に対する「B 15
A」を人材登用などで重視することが多いと思います。

そして「何をやってきた人間か」「社会や世間の保証付き
かどうか」を、学歴や肩書きですぐに見極めようとする傾
向があります。学歴や肩書きが重視されない分野であろう
とも、その人を既存の人間性や社会性のカテゴリーに分類 20

したがる傾向があるように感じています。たとえば私の場合、「ヤマザキさんは、よくしゃべるイタリア暮らしの漫画家」という情報から「主張が強い」「イタリア」「漫画家」というカテゴリーに分類されがちです。

日本では「この人はこういう人」と早々と決め付ける傾向が他国よりも強いと感じますが、そうすると、たとえば自分が思い込んでいた情報から逸脱した行動をその人が取った場合、「違う。あなたはそういう人じゃない。そういう態度はあなたらしくない」と認めようとしません。なので、私が黙っていると「ヤマザキさんらしくないですね」などと言われる。

本来そうした決め付けは、他者や世間がつくり出した「歪んだ鏡」による「反射」に過ぎません。しかし自分という実態そのものが、いつの間にか世間の決めた「その人らしさ」になっていて、本人も自分のことを「そういうもの」と認識し、むしろ「そうしないといけない」という気持ちになってくる。この他者仕様の自分をつくり出す傾向が、日本では顕著だと感じています。

日本人が早急な決め付けをしたがるのは、おそらく「この人は理解できる範疇にある人物だ」という確信に落ち着かないと、不安になるからです。そして、それに伴って

生まれた「反射」を自分の姿だと相手に思い込ませること
もまた、異質への拒絶感からくるものかもしれない。い
ずれにしても、現代の日本人は何事にも対しても「C
」を避けているように感じます。

(ヤマザキマリ『たちどまつて考える』中央公論新社)

問一

1

く

3

に入る言葉を次からそれ

ぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア、なぜなら イ、たとえば
ウ、ところが エ、ちなみに

問二

A

に入れるのに適切な言葉を本文中から

十字以内で抜き出して答えなさい。

問三 次のア～エについて、文章Iの内容として適当なものにはA、適当でないものにはBを解答欄に記入しなさい。

ア、社会学的なものの考え方を豊かにする上で、自分を名指すカテゴリーに新たな意味を持たせることは有用である。

イ、手塚治虫の作品は、作者の考えを反映して人種差別や偏見につながる表現は極力取り除かれている。

ウ、当時の人々が広く認識していた見方をそのまま受け継ぐ表現をすることで、難しいテーマでも「みてわかる」漫画になる。

エ、差別は時代や地域等でも異なるため、過去の評価された作品に差別的描写が潜んでいないか今後検証すべきだ。

問四

B に入れるのに適切な言葉を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、個人の主張の強さ

イ、個人が持つ存在感

ウ、社会的な地位

エ、社会の共通認識

問五

——線①とありますが、その理由について筆者はどのように述べていますか。理由を述べている一文を抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問六

C に入れるのに適切な言葉を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、対決 イ、弁論

ウ、熟考 エ、空想

問七

国語の授業でⅠ・Ⅱの二つの文章を読んだ後、「カテゴリー化することの長所と短所」というテーマで自分の意見を発表することになりました。このときにあなたが話す言葉を、具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書きなさい。なお、書き出しや改行の際の空欄、
、
や。
や
「
などもそれぞれ字数に数えなさい。

【五】

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

（設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。）

* 字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

二十四歳の麻生^{あそうじんせい}人生は高校生の時のいじめが原因で引きこもりとなっていた。ある日、頼りにしていた母が手紙と年賀状の束を残して失踪^{しっそう}、その中に祖母の名前を見つけた人生は四年ぶりに外に出て長野県の蓼科^{たしな}へと向かう。しかし祖母は認知症を^{わずら}患い、人生のことを全く覚えていなかった。祖母は二十一歳のつぼみという娘と同居していた。人生は祖母とつぼみと暮らしながら清掃会社で仕事をするようになる。祖母は小さな田んぼを持っているが、今年は体力的に難しい祖母に代わって人生とつぼみが米作りをすることになった。人生は仕事先で田端さんという人に出会う。田端さんの息子純平は東京の大学で就職活動中だが、希望の職に就けないので留年したいという甘い考えを持っていた。田端さんは地に足を付けて生きている人生の姿を見せたいと純平にも米作りを手伝わせてほしいと言い、純平が田んぼにやってきた。

「小六のときに、親父^{おやじ}とお袋が離婚してさ……親父つて、ばあちゃんの息子なんだけど」

『新多』ですね。おれのことだ」純平が口を挟んだので、

人生は苦笑した。

「それから母ちゃん、ひとりでおれのこと育ててくれたんだけど……おれ、高校んときにひどいいじめにあつてさ。もう、何もかもいやんなつちやつたわけ。で、それから引きこもり。今年の一月まで」

「ええっ」純平が、例によって大げさな反応をした。

「まじつすか。すげえ。じゃあ、もう引きこもり克服したつてことじゃないつすか。すげえ。まじ、パねえ」

「まあ、そうも言えるのかな」微妙な褒められ方だな、と思いつつ、人生は応えた。

「でも、どうやって克服したんすか。何がきっかけで、外に出てきたんすか？」

問われて、I 口ごもつた。

母ちゃんに愛想^Aを尽かされて、捨てられたんだよ。

それで、ばあちゃんを頼つてここまで来たら、親父は死んじまつてて、ばあちゃんは認知症になつちまつてた……。

急に黙りこくつてしまった人生の横顔を、純平は、無遠慮に眺めていた。それから、小さくため息をついて、

「ま、言っちゃなんだけど。早々と『負け組』になつちやつたつてわけつすね」

人生は、顔を上げて純平を見た。目が合うと、純平は

II 顔を逸^そらして、はきはきと言った。

「まあ、しゃーないつすよ。いじめとか引きこもりとか、ガラスの十代のときに、超ネガティブなこと経験しちやっただけだし。都会で生き抜くための熾^し烈^{れつ}な競争から脱落するのもありじゃないつすか？ そのほうが楽に生きられるんつしよ、きつと」

それは、最近まったく耳にしていなかった「あっち側」の世界に住む人間の言葉のように聞こえた。

「あっち側」とは、「いじめる側」だ。言い換えれば、「勝ち組」だ。そこに属する人間は、いつも高飛^B車で、他人に

III

再^B起不能なほど追い詰められたりすることを、想像することができない。人への思いやりなどというものをかけらも持っていないのに、合理的に、計算高く生き延びる。ずる賢く、打たれ強い。そして、根柢はなくとも、いつも何かに対して勝ち誇って生きているのだ。

子供の世界ばかりでなく、いまや大人の世界にもはびこっているいじめが露呈^Bしにくいのは、「あっち側」の人間がそれを周到にしかけているからだ。彼らは計算高いので、自分の点数が減点されるようなやり方ではしめない。家族にも学校にも会社にも、絶対にわからないようなやり方

25

30

35

40

45

で、誰かを傷つけ、追い詰める。それでいて、罪悪感など微塵^{みじん}も持たないのだ。

人生は、純平の言葉に、とつさに「あっち側」の匂いを嗅いだ。無邪気な後輩に対して少しずつ開こうとしていた心の窓が、その瞬間にきしんだ音を立てて閉じられた。

無言で立ち上がると、人生は、田んぼへと早足で歩んでいった。「あれ？」と純平も立ち上がった。人生の後ろ姿に向かつて、後輩は大声を放った。

「もう昼休み終わりつすかあ」

人生は返事をしなかった。その代わりに、田んぼにしゃがんで、再び苗を植え始めた。純平は、なんだよ、と小さく文句を言つて、そのまま仰^{あおむ}向けに横になり、目を閉じた。

田植えが終了したのは、五時過ぎだった。夕日が人々の影をきちんと並んだ苗の上に長く伸ばしていた。

結局、人生と純平は、田植えが終わるまで、ひと言も口をきかずじまいだった。純平は、人生が急に口を閉ざしてしまった理由が自分の失言にあるとわかっているようだったが、特にあやまるでもなく、めんどくせー、疲れたよ、とぶつぶつ言いながら、どうにか田植えを続けていた。途中で、急に立ち上がったつぼみが、

「うるさいよつ。そんなに面倒くさいなら、もう帰ればい

25

30

35

40

45

いじゃんっ」

いきなりどなりつけた。純平はさすがに驚いて、「さーせん。反省〜」と一応あやまつたが、気の抜けたあやまり方がいつそう気に入らなかつたのか、つぼみは膨れつつらのままで、黙々と作業を続けていた。

田植えのあとは、毎年恒例、ばあちゃんの家での宴会のお楽しみが待っている。近隣の人々が食事のしたくを手伝いにやってきてくれるのだが、去年までは台所を仕切っていたばあちゃんの代わりに、今年は志乃しのさんがひと足さき75に帰って準備を進めていた。

手に手に作業道具を提げながら、毎年参加している有志一同、和気あいあいと、畦道あぜみちを談笑しながら茅葺き屋根の家へと向かう。田植えをやり切った満足感で、誰もがすがすがしく高揚している。そのいちばん後ろから、つぼみ、80人生、純平が歩いていった。

丸一日、体を隅々まで動かして働いたあとの心地よい疲れが、人生の四肢にも満ちていた。^①それでいて、気持ちがい晴れなかつた。

昼休みのとき、何気なく純平が口にした意地の悪いひと言によつて、あつけなく心の窓が閉まってしまった。言い返すでもなく、ぶん殴るでもなく、さつと心を閉ざしてし

まう。このところ眠っていたいじめられっ子の自分、ちよつとした外界の刺激にたちまちひるんで引きこもろうとする自分が、まだいるのだ。純平のひと言よりも、そつちのほうに、すっかり気落ちしていた。

ふと、畦道の向こうに、田端さんとその妻らしき人影が現れた。ふたりは揃そろって有志一同にあいさつをしてから、人生とつぼみのそばへ笑顔で歩み寄った。

「今日は純平がお世話になりました、ほんとうにありがとうございました。かえって迷惑だったかもしれないけど……」

田端さんが礼を述べると、人生とつぼみは、無言で頭を下げた。

「なんだよ、わざわざふたりして」

ア

「だって、急な参加を受け入れて下さつて、いろいろ教えていただいただろうから、きちんとお礼くらい言わなくちやつて思つて……」

そう言いわけしてから、純平の母は人生へ向かい合つた。「いつも主人から聞いています。おばあちゃんを助けてお米作りしてるんですってね。主人の勤務先でも、麻生さんはほんとはよくがんばつておられるって……」

「まったく、麻生君の爪あかの垢あかを煎じてこいつに飲ませてや

りたいぐらいだよ」

イ

「で、どうだった？ 田植えは。少しは、皆さんのお役に立ったのか」

「知らねえよ」

父親の問いに、息子はぶいとそっぽを向いた。人生は、またむつとした。

こいつ、せつかく親父さんとお袋さんが迎えにきてくれたのに、その態度かよ。

ウ

ふたりとも、き

つとこの我がままな息子にほとほと手を焼いているのだろう。けれど、少しでも社会経験ができるように、いろいろな人たちと交流できるように、彼が望んだ生き方をできるようにと、心を砕いているのだ。だから、あえて田植え体験などという面倒なことをさせたのだ。

おもんばか

人生は、純平の両親の心中を慮おもんばかつた。息子を大切に思うからこそ、厳しい体験をさせるべきなんだと心を決めているに違いない。そう、まるで……。

まるで、引きこもりだったおれを、突き放した母ちゃんみたいな。

② 人生は、むつとしかけた表情を笑顔に変えて、田端夫妻

に向かつて言った。

「おれらのほうは、助かりました。田植えは、手伝つてくれる人が多ければ多いほど、いいつすね。今日、それがよくわかりました」

エ

(原田マハ『生きるぼくら』徳間書店)

問一

I

く

III

ぞれ選び、記号で答えなさい。に入る言葉を次からそれ

ア、ときには イ、いつも
ウ、すぐさま エ、一瞬

問二 —— 線A・Bの語句のここでの意味を次からそ

れぞれ選び、記号で答えなさい。

A 愛想を尽かされて

ア、失望されて

イ、見限られて

ウ、愛情を注がれて

エ、愛されないで

B 高飛車

ア、優秀

イ、自由

ウ、軽薄

エ、尊大

問三 —— 線①とありますが、ここでの人生の気持ちを

説明した次の文の（ 1 ）（ 3 ）に入る言葉を、本文からそれぞれ指定の字数で抜き出して答えなさい。

田植えをやり切った心地よい疲れが体に満ち、本来ならば（ 1 ※三字 ）でいっばいの気持ちになれるはずのだが、純平の心ない言葉によって、すぐさま（ 2 ※十字 ）としてしまう自分があることを認識し、弱い自分をまだ克服できていないことに（ 3 ※三字 ）している。

問四

ア エ に入る文を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- 1 田端さん夫妻は、困ったような苦笑を浮かべている。
- 2 純平ははにかんでそう言った。
- 3 純平が不機嫌な声を出した。
- 4 田端さんが口を挟むと、純平は露骨に顔を歪めた。
- 5 田端夫妻の顔が、ほっと緩んだ。

問五 ——— 線②とありますが、ここでの人生の気持ちと

して適当でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア、田端夫妻が息子を思う気持ちと、母が自分を思う
気持ちとを重ねて考え、ここでは純平に対する不
快な気持ちを抑えねばと思っている。

イ、純平が田植えを手伝ってくれて助かったのは事実
なので、純平を押しつけてきた田端夫妻に文句を
言っではいけないとこらえている。

ウ、我がままな純平に困りながらも、彼を何とか成長
させたいと願って自分のもとによこした田端夫妻
の気持ちに応えてあげたいと思っている。

エ、今はそばにいない自分の母も、田端夫妻のような
気持ちで自分を突き放したのだと実感し、田端夫
妻の助けになりたいと思っている。

問六 次のうち、本文の内容として適当なものをすべて選

び、記号で答えなさい。

ア、人生はかつて抱えていた自分の弱さを完全に克服
し、他の若者の手助けを積極的に行う青年へと成
長した。

イ、純平は、親に言われていやいや田植えを手伝い、
その最中に人生に不愉快な思いをさせた。

ウ、田端夫妻は、息子のためになることならば人に頭
を下げるのもためらわない愛情深い親である。

エ、人生は、これからも米作りを一緒に行えば、甘え
た考えの純平を必ず立ち直らせることができる
と考えている。

以下余白です。